

受験番号

【一】次の文（一）～（四）の傍線部の漢字と、後の各群の①～⑥の傍線部の漢字が同じものを、それぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

（一） サッカーの海外エンセイ試合に出発する。

- ① 時間をギセイにして物事に取り組む。
- ② 北海道旅行の日程をチョウセイする。
- ③ 相手にセンセイ攻撃を加えて勝利する。
- ④ 公園の桜がイツセイに開花する。
- ⑤ 海外旅行のためにパスポートをシンセイする。
- ⑥ 効果的な治療で難病をセイフクする。

（二） 身体にとって有害な物質をハイジョする。

- ① 優れた人材をハイシュツする。
- ② 少数意見をハイセキせずに尊重する。
- ③ フハイした社会を浄化したいと思う。
- ④ ハイシン行為の責任を問う。
- ⑤ 優勝してシュクハイをあげる。
- ⑥ 生物の発生の初期段階の個体をハイという。

（三） 仮名を漢字にヘンカンする。

- ① プロ野球入団のカンユウをきっぱり断る。
- ② カンダイな処置を期待する。
- ③ 古い美術品の価値をカンテイする。
- ④ 宇宙旅行から無事にキカンする。
- ⑤ コロナ対策として部屋のカンキに心がける。
- ⑥ それは民主主義のコンカンにかかわる。

（四） 課題を設定してタンキュウ学習をする。

- ① 真相をキュウメイする。
- ② 進級試験でキュウダイ点をとる。
- ③ ボクシングは体重別にカイキュウが区分されている。
- ④ ハローワークで仕事のキュウ人情報を得る。
- ⑤ その絵画はフキュウの名作だ。
- ⑥ 酸素のキュウニユウを行う。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一九三〇年代初め、ユクスキュル(注1)は、環境と世界の問題に関し、非常にもろい理論を展開した。

英語のエンヴァイロメントというのは、エンヴァイロン、すなわち周りをとりかこむものということである。他の言語でも同じことだ。つまり、周りをとりかこむもの、それをわれわれは環境といっている。そして、かつての「自然科学的」な認識では、環境は客観的に存在するもので、温度は何度、湿度はどれくらいであって、空気の濃度はどれくらい、酸素の濃度、二酸化炭素の濃度はどうだなど、すべて数字で記述できるもの、それが環境であるというふうに思われていた。

そこには、草もある。それにはどういう草と、どういう草があって、花が咲いている、どういう木がある、どんな石がある、等々、全部記述できるはずである。それが、そこに住んでいる動物の環境、客観的な環境である。(ア) こういう認識が、もともとオーソドックスな環境の定義であった。

(a)、ユクスキュルはそうではないというのである。

その論調は極めて理論的で、一読して簡単に理解できるとはいいい難いが、彼が例にとったダニの話は、多くの人びとに強い印象を与えた。

森や藪の茂みの枝には小さなダニがとまっている。この動物は温血動物(注2)の生き血を食物としている。ダニは適当な灌木の枝先によじ登り、そこで ⑦ エモノ をじつと待つ。たまたま下を小さな ⑧ ホニユウレイ が通ると、ダニは ⑨ ソクザ に落下して、その動物の体にとりつく。

ダニには目がないので、待ち伏せの場所に登っていくには全身の皮膚にそなわった光感覚に頼っている。ホニユウレイの皮膚から流れてくる酪酸(注3)の匂いをキャッチすると、とたんにダニは下に落ちる。酪酸の匂いがエモノの信号となるのである。

ダニがその敏感な温度感覚によって、自分が何か温かいものの上に落ちたことを知ったら、ダニは触覚によって毛の少ない場所を探し出し、口を突っ込んで血液を吸う。これでダニは食物にありつくことができ、その栄養によって卵をつくり、子孫を残す。

この一連のプロセスは、生理学的に理解すれば、まず光、次いで匂い、そして温度、最後に触覚に対する機械的な反射行動の連続のように思える。

そのように見れば、ダニは一つの機械にすぎない。けれどそこでユクスキュルは、(イ)ダニは機械なのか、それとも機関士なのかと問うのである。

光も匂いも温度も接触もすべて刺激である。しかし、刺激というものは一つの信号ではあるけれども、それが主体によって知覚されたとき、初めて刺激となるものだ。

ダニはそれぞれの信号に対してそれを意味のある知覚信号として認知し、それに対し主体として反応する。その結果、ダニは食物を得、子孫を残していくのである。つまり、ダニは機械ではなく、機関士なのである。

機関士としてのダニにとって、その環境にはさまざまなものがある。空気、空気の動き、光、日射による温度、植物の匂い、葉ずれの音、いろいろな虫の匂いや歩く音、トリの声もするだろう。しかしそれらのほとんどすべては、ダニにとって意味をもたない。

ダニを取り囲んでいる巨大な環境の中で、ホニユウレイの体から発する匂いとその体温と皮膚の接触刺激という三つだけが、ダニにとって意味をもつ。いふなれば、ダニにとっての世界はこの三つのだけで構成されているのである。

これがダニにとってみすばらしい世界であると、ユクスキュルはいう。そしてダニの世界のこのみすばらしさこそ、ダニに行動の現実さを約束するものである。(ウ)ダニが生きていくためには、豊かさよりも現実さのほうが大切なのだとユクスキュルは考えた。

(b)、それぞれの動物、それぞれの主体となる動物は、まわりの環境の中から、自分にとって意味のあるものを認識し、その意味のあるものの組み合わせによって、自分たち世界を構築しているのだ。

(日高敏隆「動物と人間の世界認識——イリュージョンなしに世界は見えない」による)

(注) 1 ユクスキュル——ドイツの生物学者

2 温血動物——恒温動物。周辺環境にかかわらず自身の体温を一定に保つことができる動物。

3 酪酸——皮脂やチーズなどに含まれ、特有の匂いをする酸。

問一 二重線部⑦～⑨のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 (a)・(b) にあてはまる最も適当な語を、次の①～⑤のうちから選び、番号で答えよ。

- ① そして ② つまり ③ あるいは ④ したがって ⑤ しかし

問三 オーソドックスな「環境」という言葉の意味を、本文中から十字で抜き出せ。

4

問四 傍線部（ア）「こういう認識」とはどのような認識か。次の文の□内に適当な語句を補え。
環境とは□①□に存在し、どれくらい何があるかなどを□②□で記述できるはずだという認識。

問五 傍線部（イ）「ダニは機械なのか、それとも機関士なのか」について、ダニを機関士だと考えた場合、ダニが血を吸うプロセスはどのようにとらえられるか。次の文の□内に本文中の語句を補え。

光などの信号を□③□として認知し、それに対して□④□として反応している。

問六 傍線部（ウ）「ダニが生きていくためには、豊かさよりも確実さのほうが大切」について、次の各問いに答えよ。

（一）「ダニが生きていく」とはどういうことか。具体的に言い換えた表現を、本文中から抜き出せ。

（二）「豊かさよりも確実さのほうが大切」とはどういうことか。次の①～④のうちから最も適当なものを、一つ選んで番号で答えよ。

① 様々な食料を豊富に得るために冒険をするよりも、わずかな食料でも確実に手に入れるほうが大切ということ。

② 草や花、木に取り囲まれた豊かな環境よりも確実に獲物を得られる環境であることのほうが大切ということ。

③ 多くの刺激を豊かに知覚するよりも、必要な刺激だけを知覚して確実に反応するほうが大切ということ。

④ 植物の匂いやトリの声などで満ちた豊かな世界よりも、みずばらしくも安全な世界のほうが大切ということ。

【三】次の文章は、夏目漱石のある小説の一節である。「僕」と従妹の田口千代子は、幼いうちに「僕」の母が将来の結婚相手と考えている間柄である。母は二人の結婚を強く望んでいるが、「僕」は積極的に千代子を求めようとはしない。以下の文章は、田口家の別荘を「僕」と母が訪れた場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

田口の叔母は、高木さんですといつて丁寧（ていねい）にその男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊（し）まった血色のいい青年であった。年からいうと、あるいは僕より上かもしれないと思ったが、そのきびきびした顔つきを形容するには、是非とも青年という文字（もんじ）が必要となったぐらい彼は生氣（しき）に充ち（み）ていた。僕はこの男を初めて見た時、これは自然が反対を比較するために、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなからうかと疑（うたぐ）った。無論その不利益な方面を代表するのが僕なのだから、こう改まって引き合わされるのが、僕にはただ悪い。洒落（しゃれ）としか受け取られなかった。

二人の容貌（ようぼう）が既に意地のよくない対照を与えた。しかし様子とか応対ぶりとかになると僕は更に甚だしい相違を自覚しない訳にはいかなかった。僕の前にいるものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親しみの深い血族ばかりであるのに、それらに取り巻かれている僕が、この高木に比べると、かえってどこからか客にでも来たように見えたくらい、彼は自由に遠慮なく、しかもある程度の品格を落とす危険なしに己を取り扱う。術（じゆつ）を心得ていたのである。知らない人を怖（おそ）れる僕にいわせると、A この男は生まれるや否や交際（こうさい）場裏（ばうり）に棄（す）てられて、そのまま今日まで同じ所で人となったのだと評（ひ）したかった。彼は

十分と経（た）たないうちに、凡（すべ）ての会話を僕の手から奪った。そうしてそれを悉（ことごと）く一身に集めてしまった。その代わり僕を除（の）け物にしないための注意を払って、ときどき僕に一句か二句の言葉を与えた。それがまた生憎（あいにく）僕には興味の乗らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にすること事も出来ず、高木一人を相手にする訳にもいかなかった。彼は田口の叔母を親しげにお母さんお母さんと呼んだ。千代子に対しては、僕と同じように、千代ちゃんという幼馴染（おきななじみ）に用いる名を、自然に命ぜられたかのごとく使った。そうして僕に、先ほどお着きになった時は、ちようど千代ちゃんと貴方（あなた）のお噂（うわさ）をしてい

たところでしたといった。

僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかった。話をするところを聞いて、すぐ及ばないと思つた。それだけでもこの場合に僕を不愉快にするには十分だったかもしれない。(a) だんだん彼を観察しているうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せつけるような態度で、誇り顔に發揮するのではなからうかという疑いが起こつた。その時僕は急に彼を憎み出した。そうして僕の口を利くべき機会が廻つて来てもわざと沈黙を守つた。

落ちついた今の気分でその時の事を回顧してみると、こう解釈したのは僕の僻みだったかも知分らない。僕はよく人を疑る代わりに、疑る自分も同時に疑わずにはいられない性質だから、結局他に話をする時にもどつちと判然したところがいいにくくなるが、もしもそれが僕の僻み根性だとすれば、その裏面にはまだ凝結した形にならない嫉妬が潜んでいたのである。

僕は男として嫉妬の強い方か弱い方か自分にもよく解らない。競争者のない一人息子としてむしろ大事に育てられた僕は、少なくとも家庭のうちに嫉妬を起こす機会をもたなかった。小学や中学は自己より成績のいい生徒が幸いにしてそうなかったためか、至極太平に通り抜けたように思う。高等学校から大学へかけては、席次(注1)にさほど重きを置かないのが、一般の習慣であつた上、年ごとに自分を高く見積もる見識というものが加わつて来るので、点数の多少は大した苦にならなかった。これらを外にして、僕はまだ痛切な恋に落ちた経験がない。一人の女を二人で争つた覚えはなおさらない。自

白すると僕は若い女殊に美しい若い女に対しては、普通以上に精密な注意を払い得る男なのである。往来を歩いて綺麗な顔と綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時のように晴れやかな心持ちになる。たまにはその所有者になつてみたいという考えも起こる。しかしその顔とその着物がどうかなく変化し得るかをすぐ予想して、酔いが去つて急にぞつとする人の浅ましさを覚える。僕をし

て執念く美しい人に附纏わらせない(注2)ものは、まさにこの酒に棄てられた淋しみの障害に過ぎ

ない。僕はこの気分に移られるたびに、若い自分が突然老人か坊主になつたのではあるまいか

7
 と思つて、非常な不愉快に陥る。が、あるいはそれがために恋の嫉妬というものを知らずに済ます事が出来たかも知れない。

僕は普通の人間でありたいという希望をもっているから、嫉妬心のないのを自慢にたくも何ともしないけれども、今話したような訳で、眼の当たりにこの高木という男を見るまでは、そういう名の付く感情に強く心を奪われた試しがなかったのである。僕はその時高木から受けた(注3)名伏し難い不快を明らかに覚えている。そうして自分の所有でもない、また所有にする気もない千代子が原因で、この嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕はどうしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした。僕は存在の権利を失つた嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。幸い千代子と百代子が日が薄くなつたから海に行くといい出したので、高木が必ず彼らについて行くに違いないと思つた僕は、早くあとに一人残りたいと願つた。彼らは果たして高木を誘つた。ところが意外にも彼は何とか言い訳を拵えて容易に立とうとしなかつた。僕はそれを僕に対する遠慮だと推察して、ますます眉を暗くした。彼らは次に僕を誘つた。僕はもとより応じなかつた。高木の面前から一刻も早く逃れる機会は、与えられないでも手を出して奪いたいくらいに思つていたのだが、今の気分では二人と浜辺まで行く努力が既に厭であつた。母は失望したような顔をして、いつしよに行つておいでなといった。僕は黙つて遠くの海の上を眺めていた。姉妹は笑いながら立ち上がつた。

(注) 1 席次——成績の順位。

2 附纏わせない——「附纏わる」は「つきまとう」に同じ。

3 名伏し難い——何とも言い表しようのない

問一 この文章は、夏目漱石の小説『彼岸過迄』の一節である。次の①～⑫の文学作品のうち、作者が夏目漱石のものを二つ選んで、番号で答えよ。

- | | | | |
|--------|--------|---------|--------|
| ① 暗夜行路 | ② こころ | ③ 羅生門 | ④ 山椒魚 |
| ⑤ 破壊 | ⑥ 金色夜叉 | ⑦ たけくらべ | ⑧ 雪国 |
| ⑨ 舞姫 | ⑩ 浮雲 | ⑪ 道程 | ⑫ 坊ちゃん |

問二 二重線部㉔㉕にふりがなをつけよ。

問三 空欄 (a) に入れるのに適当な四字の接続詞を答えよ。

問四 傍線部 A「この男は生まれるや否や交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人となつたのだと評したかった」とあるが、そのように高木を評する「僕」の思いを説明したものとして最も適当なものを、次の①ㄱ⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- ① 初対面の人にも全くものおじせず、家族のように親しげに周囲の人の名を呼ぶので、羨ましく思っている。
- ② 明るく話し上手で人づきあいに長^たけているうえ、そつない態度で会話を支配するので、不快に思っている。
- ③ 周囲のすべての人に配慮しつつも、その態度はおしつけがましいものでもあるので、うつつうしく思っている。
- ④ 品格もあり容貌も立派な人物だが、完全無欠な態度によって「僕」の居場所を脅かすので、憎らしく思っている。
- ⑤ 洋行帰りという経歴の持ち主であり、自分をよく見せる作爲的な振る舞いをするので、面白くなく思っている。

問五 傍線部 B「僕をして執念く美しい人に附纏^ひわらせないものは、まさにこの酒に棄てられた淋^{しみ}みの障害に過ぎない」とあるが、この部分で「僕」は自分をどのようにとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の①ㄱ⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- ① 美しい女性への関心が人一倍あるにもかかわらず、痛切な恋に落ちた経験がないために、自分からはどのように女性に対したらよいかわからないと感じている。
- ② 美しい女性と過ごしたいという気持ちを持つ一方で、その美しさは表面的なものに過ぎないとわかつているので、自分は惑わされることはないと考えている。
- ③ 美しい女性を見ると気持ちが高ぶるが、幼いころから感情を抑制してきたため、自分は美しさや魅力を率直に認める感性を失わせてしまったと考えている。
- ④ 美しい女性の魅力に容易に惹^ひかれることを不愉快に感じ、自己を律して冷静な自分に立ち返り欲望を抑えなければならないと考えている。
- ⑤ 美しい女性も時の経過とともに変化していくことを想像すると直ぐに冷めてしまい、自分は対象に熱中できず満たされることがないと感じている。

問六 傍線部C「僕はどうしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした」とあるが、なぜ「僕」はこのような気持ちになったのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。

① 「僕」は常々普通の人間でいたいという希望を持っていたため、人並みに嫉妬心を持っていても不思議ではないと考えていた。千代子に高木と比較されたという思いによって生じた「僕」の僻み根性が、そうした感情と結びついてしまったことにやりきれなさを覚えたから。

② 「僕」は高木の登場によって、これまでの自己認識を超えるような嫉妬心を抱いた。高木への僻み根性に根ざしたその感情は、恋人と意識したこともない千代子を介して生じたものであり、そうした感情を制御しない限り、自分を卑しめることになるような気がしたから。

③ 「僕」は今まで本当に女性を愛した経験はなかったが、ライバルである高木の存在によって初めて千代子を愛しているのではないかと考えはじめた。高木に対する嫉妬心を消し去らなければ、千代子と純粋な気持ちで恋愛はできないと気づいたから。

④ 「僕」は一人息子として生まれたうえ、学校にも競争者がいなかったため、嫉妬心を抱く環境になかった。千代子を恋人として扱う高木に萌し始めた嫉妬心は、経験したことのない感情であり、そうした感情によって動揺する自分を浅ましいものと判断したから。

⑤ 「僕」は今まで若い女性に対してあまりに臆病であつたために、本来は恋にかかわる嫉妬心が起こるはずはなかった。如才なく振る舞う高木によってかき立てられた、そうした嫉妬の感情が自分の自制心を失わせることに気づいて羞恥を覚えたから。

問七 傍線部D「眉を暗くした」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- ① 迷惑に思い顔をしかめた
- ② 心配に思い顔をゆがめた
- ③ 不審に思い顔色を変えた
- ④ 不愉快に思い表情をくもらせた
- ⑤ 不安に思い表情をこわばらせた